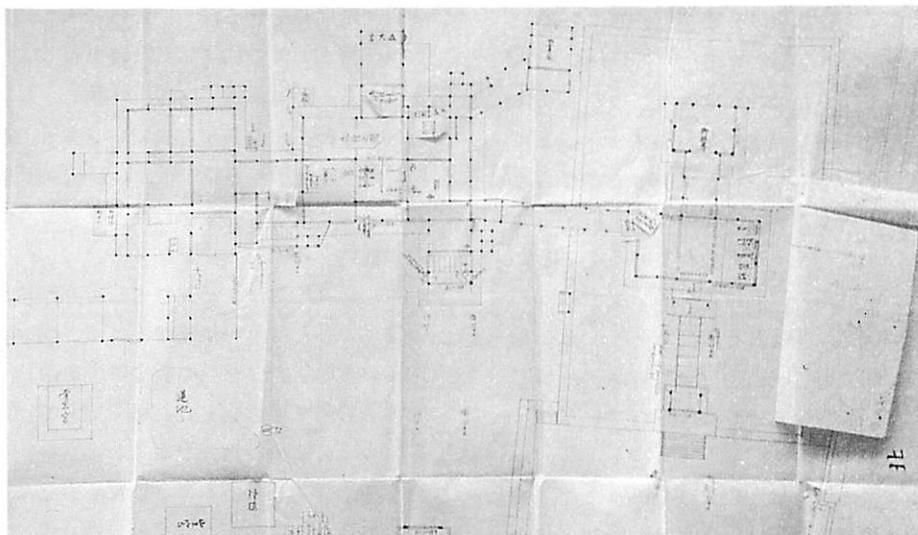


大 博物館だより

No. 20
1998.10

津山郷土博物館



東照宮二百回忌祭礼図 (部分) 文化11年 (1814) 本館蔵

これは、文化11年 (1814) 9月17日から21日にかけて、津山の愛山東照宮にて執り行われた徳川家康の二百回忌祭礼において、祭祀道具や仮設の建物の配置ならびに出役する津山藩士・僧侶の定席を図面に表したものである。写真右側の縦に並ぶ建物群が、当時落成したばかりの東照宮社殿で、細長い廊下を隔てて左側にあるのが別当寺・地藏院である (現在、この社殿は地藏院の本堂として移転され、社殿跡周辺は幼稚園となり、景観は一変している)。

家康の命日は、本来4月17日であるが、この時期の津山松平家では藩主が帰国する年には9月、江戸へ参勤する年には4月に祭礼を行っていたようである。5月に帰国、翌年4月の上旬までに参府という日程上、祥月命日に藩主が在国できないので、在国

中に一度は祭礼が行われるように工夫されたものと思われる。この二百回忌についても本来は文化12年 (1815) 4月であり、幕府による日光での法会も同年月に行われているが、津山藩主にとっては参勤後となるため前年9月に繰り上げ、社殿造営もそれに合わせて計画・施工されたと考えられる。

この時の祭礼では、5日間の期間中を通して鳴物停止が厳命され、毎日午前6時頃から出役の藩士・僧侶が地藏院に詰めて法会を行い、初日と最終日には法会の後 (午前9～10時頃) に藩主齊孝が参詣、社殿で拝礼している。そして、最終日にはその後「御赦」として罪人6人を減刑して領分追払にした旨が郡代から報告され、全日程が無事終了した。

津山の東照宮に関する疑問

—研究の端緒として—

元和2年(1616)4月17日、徳川家康が駿府にて死去した。久能山神葬の後、日光山に改葬、「東照大権現」なる神号が贈られ、幕藩体制の守護神的存在として意識的に、あるいは無意識のうちに崇め奉られるようになる。日光改葬の直後から、各地への勧請が始まるが、中でも諸大名は(全てではないが)概して規模の大きな社殿を建立して神体を祀り、家康の命日ごとに盛大な祭礼を挙行していたことが、近年の研究により明らかにされている。それらによると、盛大に祭礼を催し民衆にも参加させることによって、無意識のうちに「徳川家によってもたらされた天下泰平」を祝福させ、幕藩体制の維持・補完において何らかの効果を挙げていたであろうことが窺える。ただし、従来の研究は主に御三家や外様の国持大名などの大藩に関するものであって、その他の藩については未だ研究が進んでいないが、外様の小藩や譜代においては、あまり勧請されていなかったようだという。

では、津山藩においてはどのようなようであったか。まず、藩の種別・規模を見れば、森家は外様で美作一国18万石余(表高)、松平家は親藩で10万石(享保11年～文化14年は5万石)であり、大雑把に捉えれば中規模程度の藩と言える。しかし、松平家は家康の次男・秀康を祖とする越前家の流れを汲み、血統意識に基づく家康に対しての尊敬の念や信仰意識は強かろうと考え得る。この津山藩において東照宮がいつ勧請され、どのように信仰されていたかという点については、現在ほとんど研究蓄積がない。そこでまず研究の基礎として、主に松平家の記録類をもとに右の年表を作成した。紙数の都合上、時期の下限は文化12年(1815)の家康二百回忌までとした。まだ欠けている重要事項があると思われるが、年表の充実の詳細な研究と共に他日を期することとして、以下には年表から指摘できる問題点をいくつか挙げ、今後の指針を定めたい。

Ⅰ. 勧請時期 従来、享保10年(1725)と伝えられていたが、その根拠と言えそうな事実は確認できた。実際「東照宮」の語が見られるのはこの年以降なのだが、元文4年(1739)に江戸から「尊像」

が神体として迎えられていることや、森家時代以来安置されてきた「公儀御位牌」に家康のものは確認できないこともあり、享保10年勧請と断言はできない。また、大名家による勧請の場合、藩政確立の一環として勧請されており(そのため寛永～延宝年間に集中する)、藩政の動向も踏まえなければならぬが、この時期の松平家記録が「国元・江戸日記」に限定されるため、真相解明は困難に思われる。

Ⅱ. 社殿 地藏院内の建物は造宮・修理が何度か行われているが、現存の絵図数点(いずれも愛山文庫内)を見る限り、文化11年(1814)以前には東照宮としての独立した社殿を有していなかったようである。しかも「内陣」「靈屋」などの祭祀施設が併存しており、どこまでが寺本来の施設でどれが神体を安置する施設なのか、区別が判然としない。絵図を編年分類し、建物の変遷をたどりながら各施設の性格を見極める必要がある。

Ⅲ. 祭礼形態 祭礼は大般若経転読などの法会と藩主の拝礼などの儀式が主体で、民衆に対しては50年おきの法会において鳴物停止を命じるなど、ひたすら静粛を要求していた様子である。家康は松平家にとって直系の祖先であるから、私的に家の先祖として崇拝する側面があるのは不思議なことではないけれども、この側面が極めて強く感じられる。ことさら神聖視するあまり、民衆を交えての祭典には慎重な姿勢をとったのかも知れない。実際、盛大な祭礼を催す藩においても民衆祭礼化には警戒している。ただし津山では、4月には市町が催される美作一宮・中山神社の御田植祭、9月には練物が出る城下の産土神・徳守神社の秋祭りなどがあり、東照宮祭礼と前後して行われたこれらの祭礼との関係も考慮する必要がある。また、50年おきに供養が営まれている泰安寺(もと涅槃寺)との関係も気になる。

以上、疑問を3つの問題点にまとめてみたが、このいずれとも通底する根本的かつ素朴な疑問がある。特に松平家に関して、領知半減に象徴される財政問題を考慮するとしても、全般的に親藩として今一つふさわしからぬ祭祀状況ではないかという点である。ただし、何を以て「親藩らしい」とするかは、各親藩との比較を踏まえ譜代・外様との相違点を明確にした後に初めて言えることであり、まずは上記の問題点に関する分析・検討が不可欠であるのは論を待たぬところである。(小島徹)

地藏院・東照宮 年表

※出典は、次のように略した。「森家先代実録」→実録、「国元日記」→国元、「江戸日記」→江戸、「町奉行日記」→町、「大年寄月番日記」→月番。また、番号は愛山文庫内の資料番号。

年月日	事項	出典
天和3・5・晦	日光門主より「愛宕山寿延寺地藏院」の称号を受け、東叡山寛永寺の末寺となる。これ以前、森家により大猷院（家光）・嚴有院（家綱）の位牌が祀られていた。	作陽誌
元禄4・11	森長成、愛宕堂を建立（現存）。	棟札、実録、作陽誌
12・11・8	「公儀御位牌」を祀るゆえに、松平家より寄付米20俵を受ける。（この時、本山寺持ち）	国元
15・3・20	「御位牌」を祀り、藩主の参詣を受ける寺院として、地藏院・涅槃寺・本源寺が選定される。	国元
7・4	寄付米が10俵加増され、計30俵。	国元
宝永4・3・5	寄付米が20俵加増され、計50俵。	国元
4	破損した茅屋葺屋根の修理願い、見分のうえ葺替。	国元
6・3・2	寄付米加増が認められず、看坊を引取り、寺を藩に引渡す。	国元
5	無住となった地藏院を大円寺預けとする。	国元
10・10	常憲院（綱吉）の位牌が祀られる。	国元
正徳元・11・3	寺・愛宕堂の屋根の修理願い。	国元
5・正・4	前年12月に江戸から来た地藏院住侶、藩主に初の目見え。	国元
4・15～17	涅槃寺にて安国院（家康）100回忌供養。	国元
享保10・4・29	地藏院を東照宮の別当とし、寄付米が50俵加増され、計100俵。	国元
晦	「御宮」修復が指示される。	国元
11・4・17	地藏院にて大般若経転読会（同院での家康の祥月命日供養の初出）。	国元
12・2・17	権現堂を返し、霊屋の後に神体安置所造営が指示される。	国元
4・16	新規造営場所に遷宮、翌日祭礼（大般若経転読会）。	国元
9・20	寺社方寄付米半減、涅槃寺・地藏院・本源寺・寿光寺は2/3。	国元
元文4・9・22	東叡山勸善院鎮座の尊像が江戸屋敷に入る。（翌朝、家老・山田主膳の供奉にて津山へ出立）	江戸、勸善
10・10	津山に尊像到着、地藏院にて遷宮式。	国元
17	地藏院にて修法あり、年寄以上の藩士が拝礼。	国元
5・4・17	東照宮祭礼（以前は寺社奉行・寺社取次のみが詰めていたが、本年から年寄・奏者・大目付らが詰めるようになる）。	国元
延享元・12・朔	財政難により、計画中の普請を当分中止。	国元
明和2・2・23	今後、正五九月にも東照宮祭礼を実施すると決定。	国元
3・17	泰安寺にて安国院150回忌取越供養。	国元
4・13～17	地藏院にて東照宮150回忌の法会。	国元、C2-9
寛政6・11・14	仮殿普請完成につき下遷宮。	国元
17	祭礼（松平康哉死去の服喪により9月祭礼を延期）。	国元、C2-20
文化11・8・27	社殿造営、棟上式。	国元、C2-45、D5-37
28	境内の石砂搬入を町人有志に従事させる。	町、月番
9・15	社殿完成（現存）につき、大目付らの見分。	国元
16	神号額奉納、遷宮式。	国元、C2-46
17～21	東照宮200回忌の取越法会。	国元、町、C2-47、C-513・514
12・4・17	泰安寺にて安国院200回忌供養。 地藏院では東照宮例祭（本年から、祭礼後の諸人参詣を許す）。	国元、町、月番 国元、町、月番、A1-20・29

博物館からのお知らせ

◆平成10年度特別展 津山藩と小豆島

平成10年10月10日(出)～11月8日(日)

天保8年(1837)津山松平藩第8代藩主斉民(第11代将軍家斉の実子)は幕府に働きかけて、一部の藩領と天領との交換を実施しました。その結果、海をもたない山間の藩であった津山藩による小豆島西部6郷の領有が実現しました。この展覧会では、幕末にむかって大きく変動する日本の情勢の中で、津山藩が飛び地として小豆島をもつことの意義について、さまざまな角度から考えてみようとするものです。

記念講演会

日時/平成10年10月18日(日) 13:30～15:30

演題/津山藩と讃岐小豆島

講師/徳山久夫 日本海事史学会理事

会場/津山郷土博物館2階研修室

聴講/無料(ただし入館料が必要)

◆企画展 彫無季—その生涯と芸術—

平成11年2月13日(出)～3月14日(日)

津山市出身の彫書家彫無季(1904～1992)は書と彫刻が一体となった新しい芸術を創造しました。本年はその没後7回忌にあたります。当館ではこれを記念するため、彫無季の生涯をたどり、その芸術の背景をさぐる展覧会を開催します。とくに16歳で中学を中退し上海に遊学する以前、津山で過ごした少年時代に焦点をあててみたいと思います。

◆企画展 津山藩主松平斉民

平成11年3月20日(出)～4月25日(日)

津山松平藩は徳川家康の第2子松平秀康を祖とする親藩大名です。元禄11年(1698)初代宣富が10万石で入封しましたが、享保11年(1726)第2代浅五郎が幼少で没し後嗣がなかったため5万石に減知されました。文化14年(1817)将軍徳川家斉の第14子斉民を

養子に迎え、それとともに待望の10万石復帰を果たしました。天保2年(1831)第8代藩主となった斉民は小豆島を獲得するなど活発な藩政を展開するとともに、嘉永6年(1853)のペリーの開国要求に対しては幕府に開国意見書を提出しました。安政2年(1855)藩主の地位を養子慶倫に譲ってのちも、藩政に重きをなしました。また、元治2年(1865)朝廷から将軍家茂上洛の周旋を命ぜられ、慶応4年(1868)江戸開城にあたっては将軍慶喜から和宮らの守衛と徳川家後嗣家達の後見人を依頼されるなど、徳川一門の長老として活躍しました。この展覧会では、幕末・維新期における松平斉民の位置とその歴史的意義について、考えてみようとするものです。

展覧会会期の変更

『博物館だより』No.19で「津山藩主松平斉民」展の会期を3月6日～4月18日と予告しましたが、都合により上のように変更しました。

◆第39回美作の文化財めぐり

平成10年5月17日(日) 作東町方面 参加者40人

「出雲街道を歩く」シリーズ第4弾で、今回は土居宿から万能峠を越えて上月までの約9kmを歩きました。朝10時25分美作土居駅に集合した一行は、まず土居宿跡を見学、幕末の志々を祀る四つ塚などを経て峠をめざします。芭蕉碑の梅香塚を見て、昼前にいよいよ美・播国境の万能峠に到着。万能峠は美作側はよく整備されていましたが、播磨側は悪路でした。午後はおぼろ歩きのみ。秦河勝を祭る大避神社を経て、2時半頃ようやく上月町歴史民俗資料館に到着。管理人のおばあさんから、おもいがけない衣装の着付けの大サービス。お宮・貫一の衣装でみんな大爆笑。上月駅では列車のホームを間違えてあわてて線路を走るなどのパニングもありましたが、無事4時4分発の列車で帰ることができました。天候もまずまず、新緑の香りとともに郷土の歴史の学習を深めた一日でした。

<博物館入館案内>

- ・開館時間 午前9:00～午後5:00
- ・休館日 毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
- ・入館料 小・中学生 100円(80円)
高校・大学生 150円(120円)
一般 210円(160円)
※()は30人以上の団体

大 博物館だより No. 20

発行年月日 平成10年10月1日
編集・発行 津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
☎(0868)22-4567 ファクス(0868)23-9874
印刷 (有) 二葉

大 は津山松平藩の楯印で剣大といい、現在津山市の市章となっている。